

幼小接続期に必要な能力と保育者のかかわりに 基づいた保育実践の効果

池田明子
(2018年10月4日受理)

Validation of Early Childhood Education and Care Based on the Competence Necessary for
Transition from Kindergartens to Elementary School and Involvement of Caregivers

Akiko Ikeda

Abstract: In this research, we aimed to observe the transformation of infant's competence and verify the effect of early childhood education and care to foster necessary abilities for transition from kindergartens to elementary school. We set ten abilities (spontaneity, competence, morality, metacognition, self-control competence, thinking competence, sensory and perception, exercise capacity, language competence, expressiveness) to nurture during transition from kindergartens to elementary school.

1. Then we asked the older-child class teacher to educate and care with these ten abilities aware. 2. Then we asked the older-child class teacher to educate and care nourishing these ten abilities. Before and after this education and care, we video recorded the children playing with blocks and analyzed. As a result, positive significant differences were found in morality, self-control competence, exercise capacity and language competence. In the transition from kindergartens to elementary school, it is necessary to pay close attention to the competence of infants, but we found that to evaluate the competence of an infant, it is necessary to select more.

Key words: Transition from kindergartens to elementary school, Infant's competence,
Early childhood education and care

キーワード：幼小接続, 幼児の能力, 保育

問題と目的

平成30年度改訂の幼稚園教育要領等・小学校学習指導要領の基本方針の中で、小学校教育との円滑な接続がますます求められている。実際に幼小接続期におけるカリキュラムが各地域・園において作成・実施され始めている。

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：井上 弥（主任指導教員）、鈴木由美子、
児玉真樹子

このような流れの中で、岩立（2012）は、近年の幼保小連携あるいは接続などを主テーマとした研究を概観し、論点を整理することで、今後の幼保小連携や接続の実践の方向性について考察している。その中で、岩立は幼稚園・保育所と小学校への移行の際の難しさの内容の分類にとどまらず、どのように幼小教師が話し合うのか、どのように子ども同士や子どもと教師が学び合うのかというプロセスを詳細に見ていく実証的研究の必要性を述べている。池田・井上・三村（2015）は、実際に幼小教師が相互に保育・授業の参観・参加を通してとらえたことに関する協議内容について分析し、例えば小学校教師による保育場面における土粘土

を使った遊びを通じた参加について幼小教師で話し合うプロセスの中で、環境構成の違いの背後には、ねらいだけでなく、教材をどのように捉えているかという教材観の違いがあることを明らかにしている。このことから教材やねらいの分類ではなく、実際の子どもの成長の姿や教師同士の話し合いなどに基づいた実証的研究が必要であろう。

幼小接続期について実証的に研究しているものとして、次のようなものがあげられる。

菊池（2008）は、幼稚園から小学校へ移行する子どもにとってどのような経験が問題を生じやすくし、移行を困難にしているのかについて明らかにすることを目的とし、幼小の子どもの観察や担任教師等へのインタビューに基づいて教室内構成や時間の流れ・切り替えの様子などの学校内物理的場面や、教師の指導やかかわり、教師の考えを分析した。その結果、例えば幼稚園での直接指導と小学校での自分で考えて行動させる間接指導の違いが子どもの戸惑いを生むことが分かった。以上のことから、子どもが幼稚園で経験してきた学校内物理的場面・教師の指導やかかわり・教師の考えを小学校教師が把握したうえで小学校での子どもの行動を理解し、円滑化を図ることが幼小移行の際の支援につながることを示唆している。

また亀山（2011）は、幼児の気付きを深めるための保育者の視点を検討することを目的とし、保育者による幼児と自然との関わりの記録からKJ法を用いて生活科に繋がるであろう自然との関わりにおける気付きを分類・整理した。その結果、幼児の気付きを深める視点として、自然に対する継続性、多様性をもった興味・関心が気付きの基盤となることや、自然との関わりにおける気付きにおいて、保育者は幼児の知識面だけでなく、感情面に働きかけることが重要であることなどが明らかになった。しかし、幼児の気付きについて検討しているという意味においては、幼児の成長の一側面に着目しているものであり、幼児の成長全体については明らかではない。

川田（2009）は、小学校に入学した子どもの小学校生活への適応状況を検討することを目的として、小学校入学後の授業参観の際に、幼児期に「気になることがある」ととらえていた子どもについての幼稚園教師の評価シートの記述内容と口頭での聞き取りの結果を分析している。その結果、幼稚園教師は、小学校教師の丁寧な対応により子どもが成長していると認識していることを明らかにしている。しかし、子どもの入学後の成長は幼児期に気になっていた点に限定されていることも考えられ、子どもの成長全体を捉え切れていない可能性が残る。

2008年版幼稚園教育要領では、5領域のねらいは、「幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度など」であると記述され、2017年版幼稚園教育要領では、「幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活から捉えたもの」であると記述されている。このことから開（2018）は、ねらいが心情・意欲・態度から、資質・能力にかわったと指摘している。そして、「心情・意欲・態度（学びに向かう力、人間性等）」に「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」という資質・能力の捉え方を加えることで、育ちをつかむ視野の広がりや深まりが生まれ、乳幼児期から小学校移行の教育への連続性を踏まえた教育を行うことができるようになるとしている。

一方、和田（2013）は、小学校1年生のスタートカリキュラムの効果を分析することを目的として、「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の3つの能力ごとに、1年生担任教師が子ども一人ひとりを観点別記録にて評価したものをもとに数値化して分析している。その結果、教師自身が記録することで児童の変容や指導法の改善につながったこととスタートカリキュラムの実施に効果があったことを明らかにしている。しかし、観点別記録については、例えば「生活する力」は挨拶、手洗いなど、「かかわる力」は隣の子と話す、チャイム着席、「学ぶ力」は学習の用意ができる、話を集中して聞けるなど、どちらかという就学に慣れるために必要な内容に関するものであり、幼小接続期に必要な能力全般については明らかではない。

幼小接続期に必要な能力に関して、これまでいくつかの能力が注目されてきている。例えば、上野（2007）は身体の発達状態、感覚的技能、自主性、言語発達等を就学能力としてあげている。その他、主体性、伝え合う力（角谷・泉、2013）、有能感、社会的受容感（桜井・杉原、1985）、道徳性・協同性（中島・東・荒松・白川・西島・島崎、2012）、さらにメタ認知（藤谷、2011）などが検討されてきている。

これらの先行研究や筆者自身の保育実践経験を踏まえて整理すると、「自発性」「有能感・有用感」「道徳性（①ルールを守る②共感する）」「感覚・知覚」「運動技能」「自己制御力」「思考力」「メタ認知力」「言語能力（①話す②聴く）」「表現力」の10の能力に集約できると考えられる。

そして、子どものこれら10能力に着目することで、幼児教育において育みたい資質・能力をとらえ、幼児の成長のプロセスをとらえることができると考える。これまでの保育でも、幼児の心情・意欲・態度を育むことが幼児教育の基本とされ、幼児のあるがままの姿

をとらえ、幼児に応じながら保育のねらいに向かっていけるような保育を展開していた。また、幼児の姿のとらえ方は、幼児の発達の特徴を示す5領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）に基づいていた。その際、この時期の発達の特徴から幼児一人一人の個人差に応じた指導を行うという意味において、5領域のねらいは包括的であり曖昧であるため、保育者の幼児を見取る視点が明確でなく、幼児の成長のとらえ方は保育者の主観や経験知に頼ることが多かったのではないだろうか。しかし、幼児の10の能力に着目する保育によって、保育者の幼児を見取る視点が明確になり、幼児期の発達の特徴から幼児一人一人の個人差に応じた指導を行うことができるのではないだろうか。そして、そのことで幼児は幼小接続期に必要な力を身に付けていくことができると考える。

また、幼児の成長をとらえる際には、小学校の教科につながるものや就学に慣れるためという一面的なとらえではなく、幼小接続期に必要な能力全体に焦点を当てるという意味においても、幼児の成長のプロセスをより詳細にとらえることができると考える。更に和田（2013）のように子どもの能力に着目して実践し、その効果を実際に検証することは幼小接続期における実践内容の充実に資すると考える。ただ、このように子どもの能力に着目した実践の効果を検証する研究は、小学校教育において進みつつあるが、幼児教育に関する研究は少ないのが現状である。したがって、幼児期においても幼児の能力に着目し、幼小接続期における保育実践の効果を検証することが必要であるととらえられる。

以上のことから、本研究では、幼小接続期に必要な幼児の能力に着目し、幼児を見取る視点を明確にした保育実践を実施することで、幼児にどのような効果があるのかを検証することを目的とする。

本研究における接続の期間は、単に就学に慣れるという目的ではなく、幼児の成長を支える接続期に必要な能力に着目するという意味において、幼児期5歳児1年間を設定する。先行研究は、5歳児後期に着目した研究が多いので、本研究の観察期間は5歳児前期を対象とする。

方法

1. 対象

公立H幼稚園年長児1クラスを対象とした。1グループ5～6人で構成し、グループ構成としては、男女や気の合う友達が偏らないように担任保育者によりランダムに組んでいた。

2. 時期

第1回として2017年5月23日、第2回として2017年6月27日に実施した。

3. 担任保育者への説明

筆者は対象クラス担任保育者に、幼小接続期に必要な能力として設定した10の能力と、その具体的内容やそれぞれの能力に関する幼児の姿と保育者のかかわりについて説明し、それに留意して保育を行っていただくように依頼した。筆者が設定した幼小接続期に必要な能力と具体的内容は表1のとおりである。また、各能力に関する幼児の姿を詳細に見取り、それに応じた保育者のかかわりを理解しやすいように、3つの能力水準を例として提示した。各能力の具体的内容、及びそれぞれの能力に関する幼児の姿と保育者のかかわりの一例を表2で示す。

表1 幼小接続期に必要な能力と具体的内容

能力	具体的内容
自発性	自分が興味・関心をもったことに自分からかかわろうとする。
有能感 有用感	自分なりの課題に取り組んで、できたことや役に立てたことを喜ぶ。
道徳性①	生活や遊びのルールを理解し、自分で守ろうとする。
道徳性②	相手（生き物を含む）の気持ちや状況を感じて思いやる。
メタ認知	周囲の状況や身近な出来事の中で、自分はどうしたらいいのかが分かる。
自己制御力	自分なりの課題意識をもち、最後まで粘り強く取り組む。
思考力	物事の比較・分類・因果関係につながる事象に面白さや不思議さを感じたり気づいたりして、工夫して取り組む。
感覚・知覚	自分の興味・関心があるものの大きさ・量・色・音・感触・においなどの特徴や変化を様々な感覚を通してとらえる。
運動技能	身体の動きを調整したり、コツをつかんだりして、多様に（協応して）身体を動かす。
言語能力①	相手に自分の思いを分かりやすく言葉で伝える。
言語能力②	言葉の意味や相手の思いを理解しながら、相手の話を聴く。
表現力	感じたことやイメージしたことを言葉・身体・音楽・造形などを媒介として工夫して表現する。

表2 自己制御力の幼児の姿と保育者のかかわり例

能力と具体的内容	幼児の姿	保育者のかかわり
自己制御力 自分なりの課題意識をもち、最後まで粘り強く取り組む。	① 自分なりの課題をあまり意識せず遊びが転々とする場合 ② 自分なりの課題意識をもっているがうまくいかないとすぐにあきらめる場合 ③ 自分なりの課題意識をもち、最後まで粘り強く取り組んでいる場合	① 興味・関心をもったことに課題をもって探求する楽しさを感じることができるよう、幼児が遊びを転々とするように見える時の思いを理解しながら、共に考えたり、寄り添って一緒にしたりする。 ② 自分なりの課題に粘り強く取り組むことができるよう、幼児の揺らぐ思いを受け止めながら、寄り添って励ましたり、自分で取り組んでいるようであれば見守ったりする。 ③ 自信をもって更に取り組むことができるよう、幼児が本当に粘り強く取り組んでいるかを見取りながら、粘り強く取り組みだことを認めたり、そばで温かく見守ったりする。

4. 期間中の観察

10の能力に着目した保育について、保育者は実際どのような保育実践が行われているかということについて筆者が観察した。観察日は2017年5月30日と2017年6月20日の2回であり、10時30分から12時までの間の自由遊びやまとまった活動における幼児の姿や保育者のかかわりについて、筆者が移動式ビデオカメラを持って、ランダムに多様な場面を撮影した。

5. 手続き

1 グループごとに順番に遊戯室に入室してもらい、観察者は一連の説明を各グループに対してその都度同一に行った。観察者は提示した課題に沿って幼児が遊ぶ様子をビデオで録画した。観察者は1台の移動ビデオカメラを持ち、全ての幼児の動きをとらえることができるように、移動しながら録画した。また、第2回も第1回と同様に同じグループで、同じ順番で、一連の説明を各グループに対してその都度同一に行った。観察者が提示した課題は、積み木を使って幼稚園を作ることであり、まずは幼稚園で遊ぶ内容に関する質問、積み木の扱い方、積み木の組み合わせ方の例示という一連の説明を全てのグループで同一に行った。積み

木は、観察時だけに使用するものとして普段当該幼稚園では使用していない WAKU-BLOCK45HG1, WAKU-BLOCK45HG2, WAKU-BLOCK45H6を1セットずつ準備した。観察者からの各グループに行った遊びに対する同一の説明は次の通りである。

「今日はお友だちと一緒に遊べるように積み木をたくさん持ってきました。この積み木は一つ一つ大切な積み木だから、投げたり乱暴に扱ったりせずに、優しく大切に扱ってくださいね。」

「さて、みんなは幼稚園で遊ぶことは好きですか？」

「幼稚園にはどんなものがありますか？」

「幼稚園で何をして遊ぶことが好きですか？」

「今日はこの積み木を使って、みんなの幼稚園をここにいるお友達と力を合わせて作ってみましょう。」

「まず先生（観察者）が少し作ります。」

（立方体4個を花びらのように組立てる）

「これは何だと思う？」

（直方体3個を門のように組み立てる）

「では、これは何だと思う？」

「では、この広いお部屋の中で、この積み木を使って、みんなの幼稚園をここにいるお友達と力を合わせて作ってみましょう」

結果と考察

1. 期間中の観察

5月30日に観察した中で、10の能力に着目していることが顕著に表れている例を表3に示す。

表3 2017年5月30日の観察事例

子どもたちと保育者が『けいどろ』をして遊んでいる。『警察』役になる人、『泥棒』役になる人、『見張り役』になる人という役割分担を適宜子どもたち同士でしている。保育者は子どもたちと一緒に走った後に、『見張り役』の子どもたちのそばに行く。子どもたちが適宜保育者に話しかけると、保育者は一人一人の方を見ながら楽しそうに対話している。そして、途中で役割を交替しているA児に、『Aくん、警察？』とみんなに聞こえるような声で確認をとり、子どもたちみんなにそれぞれの役割が共有できるようにしている。しばらく走って疲れたような表情をしているB児に、『Bくん、見張り役する？』と固定遊具に座る見張り役を勧める。B児はうなずきながら固定遊具に見張り役として座る。保育者は再び子どもたちと楽しそうに走っていく。

表3に見られるように、当該園では園全体として運動遊びを積極的に取り入れていることもあり、この日も『けいどろ』という鬼遊びで遊ぶ姿が見られた。保育者は子どもたちの役割をみんなで共有できるように確認をとることで、ルールを守るという道徳性や自己制御力を育めるようにかかわっている。また、走り疲れた子どもには、その様子をよく見て少し休めるように声をかけるというように子どもに寄り添うことで、共感性を育むかかわりを行っている。

6月20日に観察した中で、10の能力に着目していることが顕著に表れている例を表4に示す。

表4 2017年6月20日の観察事例

園庭で保育者がプランターにあるバンジーを植え替える際に、何かの幼虫を発見する。そばにいたC児が図鑑を持ってきたので、保育者はC児と一緒に体をびったりとくっつけるようにしながら、小さい図鑑で何の幼虫かを調べている。C児は図鑑のページをめくり、一つの写真を指で押さえながら保育者の方を見る。保育者自身も図鑑を手に取りながらC児が指で押さえた写真を一緒にじいっと見る。そばでD児とE児が飼育ケースに幼虫のついたバンジーと土を入れ、飼育ケースにふたをして、保育者に見せに行く。保育者はE児に「でも、お花が枯れたらいけんよね」と問いかける。すると女兒は「水？」と答える。保育者は「そうそう」とうなずく。F児とG児は大きい図鑑を持ってきて保育者のそばに座り込んで見ている。つまり、保育者のそばでD児とE児は飼育ケースを見て、F児とG児は大きい図鑑を見ており、保育者は両者を見ることができるよう視線を動かしている。図鑑を見ている二人が楽しそうに見ているのを見て、保育者も楽しそうに二人の様子を見守っている。しばらくして、今度はD児・E児・F児・G児4人と保育者で飼育ケースを覗き込む。保育者は「おっ、お家作ったん？」と声をかけて、みんなと一緒に覗き込む。子どもたちも「いい感じ」と言っている。

表4に見られるように、園庭のプランターにあるバンジーについていた幼虫をきっかけに、何の幼虫かを図鑑で調べたり、飼育ケースに入れて飼えるようにしたりしている場面である。保育者は、子どもが興味・関心をもったことに課題をもって探求する楽しさを感じることができるよう、共に考えたり、そばで温かく見守ったりして、自己制御力や感覚・知覚を育めるようにかかわっている。また、自分がやりたいと思った

ことに十分取り組むことができるよう、寄り添って一緒にしたり、共に喜んだりしながら有能感が育めるようにかかわっている。

もちろん、日々の保育の中で毎日10の能力全てに着目した保育が成立するとは限らず、また今回の二日間の観察で10の能力全てを見取る場面があるわけではない。しかし、二日間の観察で先述のような能力に着目した保育が行われていたということは、日々の保育の中でそれ以外の能力に着目した保育が行われているということが推察される。以上のことから、保育者は筆者が説明した能力に着目した保育実践を行っているということが分かった。

2. 能力に着目した保育の効果を検証するための観察

4グループの各2回の録画時間のうち、最も短かった8分間をもとに、各録画のはじめの8分間の記録を分析対象とした。また、時間経過に伴う変化を考慮するために、前半4分間と後半4分間に分けた分析も行った。

分析に当たっては、ビデオ録画をもとに、幼児の行動、言動を文章化し、幼児一人一人の行動の記録とした。そのうえで、幼小接続期に必要な能力を反映する行動や言動をカウントしていった。保育経験のある観察者が決定した幼小接続期に必要な能力を分析する視点と実際に見られた幼児の姿を示したのが表5・表6である。

表5 幼小接続期に必要な能力と幼児の姿の例(第1回)

能力	分析の視点	第1回 幼児の姿の例
自発性	自分から作るうとする	(自分からというのがほぼ全てといえは全てなので逆に抽出するのが難しい)
有能性	できあがったことを喜ぶ	・I児は縦長4段を慎重に作り、観察者の方を向いて「できた」と言う。
道徳性①	積み木の扱ひ方のルールを守る	・Y児はA児の様子をちらりと見て「倒しちゃ、いけんよ」と声をかける。
道徳性②	友達のことを思いやる	・O児は自分が作ったもののいったん壊した積み木を、S児がすぐに並べやすいような位置に置く。
メタ認知	今は幼稚園を作る時だということが意識できる	・N児とU児は二人で一緒に作ろうと、同じ形の大きな積み木を持って来て、「恐竜幼稚園作ろう」と観察者の方を見ながらつぶやく。

自己制御力	積み木が倒れないようにそっと積み上げる、倒れたらあきらめずに再度積み上げる、友達と折り合いをつけながら作る	・A 児は几帳面にずれないように積み木を慎重に高く積み上げる。通路のようなものを端と端を揃えるようにきちんと並べようとする。 ・積み上げたものが不安定で崩れてしまうが、S 児は「ああ～」と言いながら、再度素早くやり直し始める。
思考力	幼稚園を作るために、工夫しようとする	・Y 児は何かをイメージしているのか、積み木を両手に持って組み合わせてみては、また違う積み木を組み合わせ直してみる。
感覚・知覚	様々な感覚を通して感じとる	・三角の積み木を2個合わせると四角になることを発見し、「あっ、これじゃ」と二つの積み木の組み合わせがぴったり合ったことに関心が向き、観察者に示す。
運動技能	積み木が倒れないようにそっと積み上げる	・S 児は2本の柱状に積み上げながら一番上に三角の積み木を置こうとするが、2本の柱の間隔が微妙に開いていて、上に三角を乗せられそうにないので、慎重に2本の柱の間隔を狭くする。
言語能力①	友達とやりとりしながら作る	・N 児とU 児は一緒に積み木を取り、「いいよ」「でもさ・・・」「これが・・・と相談する。
言語能力②	教師や友達の話を聴く	・S 児は隣で作っているA 児の様子を見て、「もしかしてこれ迷路？」と尋ねる。
表現力	自分のイメージを膨らませたり、工夫して作ったりする	・U 児が作っているものを見て、K 児は「幼稚園もっ」と長いでしょ」と言いながら柱の位置を広げるように移動する。

表6 幼小接続期に必要な能力と幼児の姿の例(第2回)

能力	分析の視点	第2回 幼児の姿の例
自発性	自分から作るうとする	(自分からというのがほぼ全てといえは全てなので逆に抽出するのが難しい)
有能性	できあがったことを喜ぶ	・U 児とA 児は積み木を積み上げては「おおっ」と歓声を上げる。すでに子どもの胸辺りまで来ている。
道徳性①	積み木の扱ひ方のルールを守る	・積み上げた積み木が倒れたのを見て、S 児は「もっと大事に使わないと、壊れるよ」と積み上げていた3人に聞こえるようなはっきりとした声で言う。
道徳性②	友達のことを思いやる	・I 児が高く積み上げた上に更に平板を爪先立ちながらのせようとしているのを見て、T 児は自分の方が少し背が高いから手が届きやすいと思ったのだろう、I 児から平板を受け取り、そっと上に積み上げる。
メタ認知	今は幼稚園を作る時だということが意識できる	・K 児は「じゃけえ、こうやってつなげるんよ」とやって示しながら「みんなでくっつけて幼稚園作るんよ」と再度A 児の方に向かって言う。
自己制御力	積み木が倒れないようにそっと積み上げる、倒れたらあきらめずに再度積み上げる、友達と折り合いをつけながら作る	・A 児は小積み木を縦2本柱のように立て、その上に横板をそっと置きということを繰り返して、バランスを保ちながら上に積み上げていく。 ・I 児とT 児が積み上げているものはすでに自分たちの頭の高さを超え、「11階建て～」と言いながら背伸びはしてるけれども慎重に積み木がぐらつかないように積み上げる。
思考力	幼稚園を作るために、工夫しようとする	・G 児は積み上げているものに大きな平板をのせてみて、今度はそれを180度向きをかえてのせてみるが、納得がいかないようで再び手に取り、今度はそれを立ててみようとする。

感覚・知覚	様々な感覚を通して感じとる	・A児が積み上げていたものが崩れてバラバラになった積み木をE児が持っているとする、A児は泣きそうな困った表情でE児に「なんで取るん？」と言い、E児はA児の表情を見て積み木を取ろうとした手を止める。
運動技能	積み木が倒れないようにそーっと積み上げる	・T児はぐんと背伸びしてでも身体がぐらつかないように調整しながら積み上げたものの上に平板をそーっと置く。
言語能力①	友達とやりとりしながら作る	・T児とI児は二人で協力して積み木を積み上げ、二人で声を揃えるように「6階建てえ〜」「7階建て〜」と積み上がっていく楽しさを共感し、やりとりを楽しみながら積み上げる。
言語能力②	教師や友達の話を聴く	・O児はS児が作っている様子を見て「歩く所？歩く所？」とS児が反応するまで尋ねる。
表現力	自分のイメージを膨らませたり、工夫して作ったりする	・階段状に並べている積み木の端から、E児が細長い小さい積み木を人に見立てて、「トコトコトコ」と言いながら階段を上るように積み木を動かす。

また幼小接続期に必要な能力について、能力ごとに前半後半、全体であられた頻度を示したものが、表7である。

表7 幼児の能力の変容

	第1回（1回目）			第2回（2回目）		
	前半a	後半b	全体	前半c	後半d	全体
自発性	0	0	0	0	0	0
有能性	6	4	10	12	5	17
道徳性①	0	1	1	5	8	13
道徳性②	1	3	4	6	7	13
メタ認知	5	0	5	5	2	7
自己制御力	8	14	22	22	18	40
思考力	1	3	4	7	2	9
感覚知覚	9	7	16	6	8	14
運動技能	0	3	3	11	10	21
言語能力①	9	14	23	25	15	40
言語能力②	4	1	5	1	1	2
表現力	28	15	43	21	13	34

表7をもとに、能力を意識した保育実践の効果を明らかにするために、第1回・第2回の各能力の出現した事例数に偏りがあるかどうかという頻度について χ^2 検定を行った結果、以下のことが明らかになった。第1回目と第2回目の比較を見ると、道徳性① ($\chi^2(1)=10.3, p<.05$)、道徳性② ($\chi^2(1)=4.8, p<.05$)、自己制御力 ($\chi^2(1)=5.2, p<.05$)、運動技能 ($\chi^2(1)=13.5, p<.05$)、言語能力① ($\chi^2(1)=4.6, p<.05$) で、第2回全体の方が第1回全体よりも有意に多くなっていた。しかし、自発性、有能性、メタ認知、思考力、感覚・知覚、言語能力、表現力では、このような差は見られなかった。

次に、このような違いが、積み木遊びの過程のどの時点で起こるのかを検討するため、各回の前半と後半に分けて、第1回と第2回の比較を行った。

まず、第1回前半aと第2回前半cを比較したところ、自己制御力 ($\chi^2(1)=6.5, p<.05$)、思考力 ($\chi^2(1)=4.5, p<.05$)、運動技能 ($\chi^2(1)=11.0, p<.05$)、言語能力① ($\chi^2(1)=7.5, p<.05$) で、第2回cの方が第1回aよりも有意に多くなっていた。しかし、自発性、有能性、道徳性①②、メタ認知、感覚・知覚、言語能力②、表現力では差は見られなかった。具体的に見ていくと、自己制御力については、第1回前半aでは例えば、「積み木がずれないように端と端を揃えるようにしながら、慎重に高く積み上げる」「積み上げていた積み木が崩れたので『あ〜あ』と言いながら、再度やり直し始める」というような姿が見られた。一方、第2回前半cでは、「小積み木を縦2本柱のように立て、その上に横板をそーっと置きということを繰り返し、バランスを保ちながら上に積み上げていく」「自分の目の辺りまでの高さを慎重に積み上げていく」「自分の背の高さよりも高く積み上げようとして積み木が倒れたが、少し笑みを浮かべながらも、再度最初からやり始める」という姿が見られた。このように、第1回前半aに比べて第2回前半cの方が、より高く積み木を積み上げることを慎重に行っていることと、積み木が倒れても再度やり直すという内容が増えていることが分かった。

思考力に関しては、第1回前半aでは「何かをイメージしているようで、両手に積み木を1個ずつ持って組み合わせさせてみては、また違う積み木を組み合わせさせて考えてみる」という姿が見られた。第2回前半cでは「いったん自分が持っていた大きな平板を自分が積み上げてきたものにのせて見て、今度は180度向きをかえてのせてみるが、納得がいかないようで再び手に取り、今度はそれを立ててみようとする」「上に煙突のように積み木を縦にして立ててみるが、少しその様

子を見つめて煙突状のものを取り去り、天井のように箱型の上に広い積み木をのせる」という姿が見られた。このように、第1回前半aに比べて第2回前半cの方がよりよく考えながら試してみようという内容が増えていることが分かった。

運動技能に関しては、第1回前半aでは0項目であった。一方、第2回前半cでは「四角の枠にかたどった積み木を慎重に高く積み上げ、それを両手で両側から支えるようにきちんと揃える」「自分たちの頭の高さを超えるぐらい積み上げ、背伸びしながらでも積み木がぐらつかないように積み上げる」というような姿が見られた。このように、第1回前半aに比べて第2回前半cの方がより高く積み木を積み上げることに取り組んでいる内容が増えていることが分かった。

言語能力①に関しては、第1回前半aでは「いいよ」「でもさ・・・」というように相談する姿、「もしかして迷路?」「うん、そうそう」というように尋ねたりそれに答えたりするというような姿が見られた。第2回前半cでは「6階建てえ」「7階建てえ」というように楽しさを共感しながら作っている姿、「壊しちゃ、だめ」「違う」というように思いを主張し合うという姿が見られた。このように、第1回前半aに比べて第2回前半cの方が、共感し合ったり、思いを主張し合ったりする内容が増えていることが分かった。

次に後半について、第1回後半bと第2回後半dを比較したところ、第2回後半dの方が第1回後半bよりも有意に多くなっている項目は見られなかった。

以上のことから、 χ^2 検定により幼小接続期に必要な能力と保育者のかかわりに基づいた保育実践の効果を検証した結果についてまとめてみると、次のとおりである。今回設定した幼小接続期に必要な能力として設定した10項目のうち、保育実践の第1回と第2回で有意差が見られたのは、道徳性①、道徳性②、自己制御力、運動技能、言語能力であった。期間中の観察にも見られたように、保育者が上記の能力に着目して保育実践を行った効果があらわれたということが考えられる。次に、自発性、有能性、メタ認知、思考力、感覚・知覚、表現力に関しては、第1回と第2回では有意差が見られなかった。この要因としては次の2点が考えられる。1点目は、幼児の能力のとらえ方についてである。幼児の能力に着目することで幼児を見取る視点は明確になっているが、10の項目数は保育者にとっては多すぎて、実際の保育に反映しづらいということが考えられる。また、10の能力の水準が多様であり、例えば保育者にとって運動技能はとらえやすいが、自発性は概念が広すぎて逆にとらえづらいということが考えられる。そのような意味では、今後10の能力を再整

理する必要がある。2点目は、保育実践の効果検証の方法についてである。本研究では検証の方法として積み木を使用している。しかし、積み木で遊んでいる姿からはとらえづらい能力もあった。例えば有能性は、もっと活動的でダイナミックな遊びであれば、より見取りやすいと考えられる。そのような意味では保育実践の効果検証のためには様々な課題の設定の仕方が必要である。

まとめ

本研究では、各地域・園で幼小接続期カリキュラムが作成・実施され始めている中で、保育者の側ではなく幼児自身の成長を詳細に見るために幼児の能力に着目した。幼児の能力に着目することで、幼児を見取る視点が明確になり、それに基づいた保育実践を行うことで、その効果を検証することができたということが本研究における成果であり、今後の幼小接続期における保育実践の質を高めていくことに資すると期待する。

一方、幼児の能力に着目した保育実践の効果検証の方法や保育者による幼児の能力のとらえ方には課題が残った。特に、保育者が保育実践を行う中で能力を見取る視点や能力そのものの精選などについて今後も追究していく必要がある。

【謝辞】

本論文の作成にあたり、観察にご協力いただきましたH幼稚園の先生方や子どもたちに深く感謝申し上げます。

【引用文献】

- 池田明子・井上弥・三村真弓(2015) 幼小接続期におけるカリキュラム開発の基礎的研究－ねらい、教材、環境構成の視点から－ 乳幼児教育学研究第24号 pp.59-65
- 岩立京子(2012) 幼保小連携の課題と今後の方向性 保育学研究第50巻第1号 pp.76-83
- 上野ひろ美(2007) 保幼小連携の課題に関する考察 奈良教育大学教育学部教育実践総合センター研究紀要第16号 pp.109-121
- 亀山秀郎(2011) 生活科に繋がる幼児の自然との関わりにおける気付きの検討－KJ法を用いた年長組担任保育者の記録から－ 乳幼児教育学研究第20号 pp.95-106

- 川田学（2009）幼稚園教諭にとって「ちょっと気になる」子どもの幼稚園から小学校への移行－第1学年に少人数学級を導入することの効果と関連して－香川大学教育実践総合研究18 pp.53-63
- 菊池知美（2008）幼稚園から小学校への移行に関する子どもの生態環境の相互調節過程の分析：移行期に問題行動が生じやすい子どもの追跡調査 発達心理学研究第19巻第1号 pp.25-35
- 中島朋紀・東ゆかり・荒松礼乃・白川佳子・西島大祐・島崎真由美（2012）幼小連携のカリキュラムについての研究－「道徳性」「協同性」の育成－ 鎌倉女子大学学術研究所報第12号
- 桜井茂男・杉原一昭（1985）幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究第33号(3) pp.237-242
- 角谷・泉（2013）小学1年生1学期の発達・適応を促進する幼児教育 上越教育大学研究紀要第32号 pp.127-136
- 開仁志（2018）保育内容5領域と育みたい資質・能力の関係についての考察 金沢星稜大学人間科学研究第11巻第2号 pp.59-64
- 藤谷智子（2011）幼児期におけるメタ認知の発達と支援 武庫川女子大学紀要 第59号 pp.31-42
- 和田信行（2013）スタートカリキュラムの実施とその効果の検証 東京成徳短期大学紀要第46号 pp.1-10